

## 『終わりの時の幻』 (ダニエル書 8章 15-28節) 2022.2.13.

<はじめに> 7章から2年後、バビロニア帝国ベルシャツアル王第3年(BC551)に、ダニエルはもう一つの幻を見ました。彼は幻の中で、エラム州スサの城、ウライ川のほとりにいます。ウライ川はチグリス・ユーフラテス川の下流三角州にある支流もしくは運河用水と思われる。

### I もう一つの幻

#### ①一匹の雄羊(3-4、20)

2本の角を持つ雄羊は、短い角はメディア、長い角はペルシャの王です(20)。後者の方がやがて優勢になりました。川岸に立ち、西・北・南に突進するのは、この国の侵攻の動きです。メディア・ペルシャ帝国は、バビロンを倒してBC539-331を支配します。

#### ②一匹の雄やぎ(5-8、21)

そこに際立つ1本の角を持つ雄やぎが西から飛び回り来て川岸に立ち、雄羊に突進し打倒します。雄やぎはギリシャ帝国、際立つ角はアレクサンドロス大王(BC335-323 治世)で、ペルシャははじめ中近東を制覇した最中に急死し、4人の将軍が帝国を分割します。

#### ③小さな角(9-12、22-25)

小さな角は横柄で狡猾な一人の王(23,25)で、彼は南・東・麗しい国(9)に向かいます。シリアのアンティオコス4世=エピファネス(神の顕現の意味、BC175-164 治世)は、ユダの神殿にゼウスを祭らせ、律法で禁忌されている豚をささげる屈辱を与えます。

### II 幻の意味

#### ①呼び掛ける声(15-17)

ダニエルは幻の意味を理解したいと願うと、ウライ川の中程から声が響きます。帝国と諸王が行き交う所に、姿は見えなくてもすべてを知り治めておられる方が確かにおられます。この方は、ダニエルの願いを聞かれ、ガブリエルを遣わし、幻を解き明かされます。

#### ②悟れ、見よ(17-25)

この幻はダニエルのいるBC551年からは遙か先の事です。永遠の神は備えさせるために将来の幻を見せることがあります。出来事や動きの奥に隠されている真理を悟ることが求められます。対照的な姿は真理を地に投げ捨て、身勝手を行う角(王)に見られます(12)。

#### ③幻を秘めておけ(26)

この幻は真実ですが、今は秘めておくようにと言われます。すべての人が神を知り、その計画を素直に受け取るとは限りません。幻を見た者が高ぶる危険もあります。幻が真実であることは、時間が進むほどに明らかになります。心に納めて思い巡らし続けるのです。

### III 終わりの時

#### ①終わりの時の幻(17,19,26)

時は漫然と繰り返し進むのではなく、終わりに向かって歴史は着実に進んでいる、これが聖書の歴史観です。ダニエルの見た幻は、この地上で行われる人の「憤り」(19)の業の行く末であり、神の定めた計画が実現される描写です。この両方が終わりに向かいます。

#### ②歴史に働く神(I コリント 14:33)

歴史(History)をHis Story(神の物語)という人がいます。歴史の中に神は働かれることは本書の鍵句 4:25 の示すところです。ですから、過去の歴史から神が如何なる方でどう対処されるのかを汲み出せます。それを今と将来に適用するのが神への信仰です。

#### ③その後、起きて(27)

壮大な歴史の行く末を幻で知らされたダニエルは数日寝込みますが、その後起きて普段の生活に身を置きます。驚きと困惑を抱えながらです。仕えている王の行く末も大まか知りつつ、今自分に与えられた務めを果たすことは、幻を見た信仰者に相応しいことです。

<おわりに> 壮大な歴史絵巻の中で、神の眼差しは麗しい国(9)と聖所(11,13,14)と聖なる民(24)を見据えています。私たちが苦難・困難を通るときにも、この方は私たちを忘れてはいません。この世を歩みながら、私たちは神を仰ぎ、神を知り、神を信頼して歩むのです。(H.M.)